

国際協力特別賞

平和への一歩

山形県立鶴岡北高等学校 1年

渡會 奏

私には夢がある。それは、世界の平和のために働くことである。具体的には、教師になって、十分な教育を受けられない子供達に希望を与えたい。この夢の始まりは、一人の少女の存在と海外研修事業だった。

中学2年生の時、私はマララ・ユスフザイさんのことを知った。彼女はパキスタンに住む、勉強が好きなごく普通の少女。しかし、「女の子というだけで学校で勉強する機会を奪われたくない」とブログで訴えたために、タリバンに銃撃された。奇跡的に命を取り留めた彼女は、今も教育の自由を訴え続けている。初めに浮かんだのは一つの疑問。「何故女の子が教育を受けることが許されないのか」という怒りに近いものだった。世界中に十分な教育を受けられない子供達が多くいることは知っていた。しかし、私が思っていたよりも現状は酷いものだったのだ。そんな中で教育の自由を訴え続けている彼女は本当に勇敢な人だと、また、そのような人になりたいと当時の私は強く思った。2014年12月、ノーベル平和賞を受賞した彼女は、スピーチの中で、

「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、一本のペン、それで世界は変えられる。教育こそがただ一つの解決策です。」

と言った。私はその「一人の教師」になりたい。

同年12月、私が住んでいる町の合併10周年を記念して行われた青少年海外研修で、マレーシアを訪れた。4泊5日の研修の中で、私の一番の目的は、現地で環境教育に関する活動をしている青年海外協力隊員の女性のお話を聞くことだった。日本とは異なる文化や習慣から生まれる「環境」に対する意識の差や活動の中でどんな壁にぶつかり、それをどう乗り越えてきたのか、そして現地NGOとの連携について知った。外に一步踏み出せばゴミで溢れている町、茶色く濁った川、それらを普通だと思っている人々。マレーシアだけではない、世界にはこんな状態の国はたくさんある。日本は何て恵まれているのだろうと改めて気付かされた時間だった。マレーシアを訪れて感じたことは、「自然の大切さ」、「人との関わり」だ。美しく雄大な自然を、そこに住む動物達の居場所を、私達人間が奪っているということを知り、ショックだった。また、それらを守るために、協力隊やJICA、NGOなど多くの人が、様々な方面から支援を行っていることを知り、感動した。世界のために働こうと決意したのはこの研修旅行での体験があったからでもある。

私達が住んでいる日本は、他国に比べて発展している所がたくさんあり、素晴らしい国だと思う。今、世界のためにすべきことは、日本の持っている力を分けてあげることだと私は思う。そのために、私ができることは何か。まず、「学ぶこと」だ。学校での勉強はもちろん、世界の現状、人々の暮らし、どんな支援が行われていて、これからどのような支援が必要とされるのか。学び、考えることから始めていこうと思う。次に、「学んだことを活かすこと」だ。その方法として私が見つけたのが「教師になる」という方法だった。貧困や差別などが原因で十分な教育を受けられず、夢を奪われてしまう子供達がたくさんいる。私は自分の学んだことを、子供達に教え、希望を持って欲しい。今よりもずっと平和な世界を、共に創っていきたい。もちろん私だけでは力が足りない。だから、私と同じような志を持つ人を一人でも多く育てようと思ったのだ。小さな力も集まれば大きな力になる。私ができることから始めていく。それがいつか、平和な世界になるための一歩だと信じて。